

すこやか&スマイル

先ずはじめに訂正とお詫びです。

前月号(2009/04月号)で、3月19日に桜の開花宣言が発表されたのを、観測史上最も早い日と記載しましたが、2002年は3月18日に開花宣言が発表され、これが現時点で最も早い記録です。

今年はそれに次ぐ観測史上代2位の記録でした。

大変失礼しました。お詫びいたします。 m(_ _)m



害虫と殺虫剤

初夏の陽気になりさまざまな虫たちや小動物が出てきました。

害虫と言いますが、『害虫』とはいったい誰が・何を基準に決めたのでしょうか？

厚生労働省では、薬事法や食品衛生法で『衛生害虫』・『食品害虫』を、経済産業省や農林水産省でも該当する法律や規則・基準等で『不快害虫』・『衣類害虫』・『建築害虫』、『動物外部寄生虫』・『農業害虫』を対象害虫として分類しています。

難しい分類はさておき、一般的に考える害虫とは、病気を媒介したり農作物や建物等に被害を与えたりする昆虫や寄生虫・ダニ等の虫だと言えます。

病気を媒介する蠅・蚊・ゴキブリ・ダニ等や農作物に重大な被害を与える蛾の幼虫やバッタ類・ミバエ・アブラムシ等、建物等に被害を与えるシロアリやクイムシ等を駆除することは、生命の安全と住み良い環境を守り、経済的な被害を少なくするために必要な事だと思えます。



ただ、最近気になるのは、そうでない虫に対しても過度に怖がったり気味悪がったりして、安易に殺虫剤を使用する傾向にあり、また、それを助長するようなコマーシャルが氾濫していることです。



100万種を越えるといわれ、3億年以上前から生息している昆虫を、たかだか数百万年前に誕生した人間が、自分達の立場で勝手に決め付けて『害虫』だ『益虫』と区別されるのは、昆虫達にとってはとても迷惑なことでしょう。



人間が、一方的に『害虫』のレッテルを貼って駆除しようとしても、根絶やしにする事は不可能ですし、もし、そのようなことをすれば、環境破壊や二次的公害をもたらすことになります。

安易な薬剤・殺虫剤の使用は大変危険です。



今回は、家庭内に侵入してくる『衛生害虫』・『不快害虫』と『殺虫剤』について考えてみたいと思います。

衛生害虫：人間の衛生環境を悪化させる害虫のことで、人の血を吸うもの、咬んだり刺したりする害虫、人や食品などに触れることで不潔にし、場合によっては感染症の病原体を運び、人々や食品加工業などに多大な影響を与える害虫のことをいいます。虫体がアレルギーとなる場合もあります。

蠅・蚊・ゴキブリ・ノミ・シラミ・南京虫・ダニなどが代表的です。

不快害虫：英語の“Nuisance”を和訳したもので、虫に限らず忌み嫌われるものの総称で、“不快”と訳しています。

衛生害虫以外の害虫は全て不快害虫という扱いを受けます。ただ、不快という概念(感覚)は人それぞれ千差万別で、定義付けは大変難しいのですが、一応「生活の場で病気などの媒介・伝播を行うことなく、もっぱら感覚的な加害を行うもの」というように定義付けられているようです。

家庭用殺虫剤

殺虫剤の有効成分の種類としては、有機塩素剤・有機リン剤・カーバメート剤・ピレスロイド剤等があります。1950年代に登場したDDTに代表される塩素系殺虫剤は、安価で効果も大きいことから広く一般家庭でも使用されてきました。

しかし、1971年に生物連鎖濃縮性、環境汚染につながる物として、輸入・製造及び販売が中止されました。現在使用されている家庭用殺虫剤は、ピレスロイド系殺虫剤が90%以上を占めています。

ピレスロイドは除虫菊に含まれる有効成分の総称で、20世紀初頭から研究が進み、合成ピレスロイドが多数開発されています。

除虫菊（シロバナムシヨケギク）はヨーロッパでその粉末を農薬として利用していました。

日本には明治時代に導入され、明治23年に上山英一郎（大日本除虫菊創業者）が渦巻き型の蚊取り線香を発明しました。

現在ではピレトリン類似化合物の合成ピレスロイドが殺虫成分の主流となり、産業としての除虫菊栽培は終了しています。



家庭用殺虫剤の剤型としては、蚊取り線香・電気蚊取（マット式・液体式）・ファン式蚊取・エアゾール・くん煙剤・全量噴射式エアゾール・毒餌・粉剤・油剤・乳剤など使用目的に応じて種々のタイプがあります。

殺虫剤の成分は、哺乳類・鳥類に対する毒性は比較的低いものの、昆虫・両生類・爬虫類並びに魚類に対しては高い毒性があり、アレルギーともなります。大量にさらされると紅斑・皮膚炎などの皮膚症状、気管支喘息、吐き気・下痢、頭痛などの症状が現れることがあります。

また、**発癌性**が指摘されたり、**化学物質過敏症**の原因物質としても問題視されたりしています。

病気を防ぐために使った防虫剤・殺虫剤が原因で、病気になったのでは本末転倒。

細心の注意を払って必要最小限。使わなくて済めばいいのですが…

環境に配慮した比較的安全な防虫・殺虫方法

忌避剤と誘引殺虫剤

忌避剤は、蚊・ノミ・シラミ・ダニなどによる吸血の被害を防ぐ目的で開発されました。

最近ではゴキブリなどの侵入を阻止するもの、ネズミによる電線やケーブルへの“かじり”被害を防止するためのもの、ハトの飛来や犬・猫の進入防止用までさまざまな種類があります。

タンスなどに入れる防虫剤で天然由来の樟脳は、クスノキの精油の主成分です。

特有の芳香があり臭気に敏感な人には辛いものがあるでしょう。

その他、松や檜からも同様の精油が取れます。木酢液や竹酢液にも忌避効果がありますが、特有の刺激臭があります。

誘引殺虫剤はその名の通り餌や匂いで目的とする害虫を誘き寄せ、食べることで殺虫するものです。

ゴキブリ用ベイト（毒餌）や蟻の巣ごと壊滅させるものがそれに当たります。

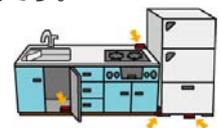
誤飲・誤食に気を付ければ現状で考えられる殺虫剤の中では危険度が低いといえると思います。

但し、その対象とする害虫の習性・繁殖場所を考慮して、適所に適量を配置することは当然です。

所謂“ホウ酸ダンゴ”は即効性はないものの、一度効力を発揮するとその持続性は長く、

2~3ヶ月或いは1シーズンの間はゴキブリの発生を抑える効果があります。

温かなる頃に仕掛けておけばよいでしょう。



防虫網戸・蚊帳



蚊の体長は概ね2~5mm、蠅は7~8mm程度です。しかし、センチクバエやチョウバエは体長1mm程度と小さく、目の粗い網戸では進入してくる可能性があります。

一般的に用いられるネットは16~24メッシュ（1インチ（2.54cm）に網の目が何本か）が主流ですが、最近では30メッシュなどの細かい網目のものも販売されています。



ただ、網目が細くなればなるほど当然通気性は悪くなります。

蚊帳の起源は古く、『播磨国風土記』に“応神天皇が播磨の国を巡幸の際に御殿を造って蚊帳を張った”という記述があるそうです。

昭和40年頃に生産のピークを迎え、その後急速に下降しましたが、最近は電気も薬品も使用しない防蚊手段として、エコロジーの観点や薬品アレルギー対策として見直され始めています。

少しでも水溜りがあると蚊は産卵します。食べ物の始末が悪いと蠅やゴキブリが集るだけでなくダニも発生します。蟻は餌の在処を覚えると継続して集まります。まずは、**片付け・掃除**でしょうか…